

よいやみ／中秋の月が出るまでの薄暗い闇のような時間帯のこと。日が暮れるのは早い、月の出が遅くなるので、夕方に日が暮れて月明かりが感じられるまでの暗い間を表す。

らしらく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

親と子に 寄り添う 子育て支援



- ▶らしらくレポート 子育ての「なんとなく不安」を「安心」へ!
- ▶らしらくコラム・「育児不安やストレス」との付き合い方 ▶ようこそ!公民館へ～東区内公民館～
- ▶人材バンク 名人 宝人 達人 ▶Hm助成支援団体のご紹介 ▶情報の森 ▶プラザ通信



安心して笑顔で 子育てできる社会のために

オープンスペースの様子(ひろばKUSU-KUSU佐東)

CLOSE UP

親と子に寄り添う子育て支援

今回は、親が安心して子育てができる環境を整え、子どもを取り巻く問題解決の手助けをし、誰もが豊かに暮らせる社会を目指すなど、子育てに関するさまざまな不安を解消するために活動をしている団体を紹介します。

特定非営利活動法人e子育てセンター

<http://e-kosodate.net/>

時代に先駆け、インターネットを活用した子育て支援を始める

自分たちの子育て経験をもとに、たくさんの子育て中のお父さん、お母さんが笑顔でいられるようにと、地域で顔の見える子育て支援をモットーに、平成16年に任意団体としてスタートし、平成23年に「特定非営利活動法人e子育てセンター」は設立されました。団体名には「エンジョイ」「エレクトロニクス」という意味と「いい子育てができるように」との願いが込められています。



▲ 代表理事の森崎智美さん

「設立当初は広島市にはファミリー・サポート・センターや常設の子育てオープンスペースがまだありませんでした。その中で、地域の子育てを応援したいとの思いから活動を始めました。まだパソコンやスマートフォンが今のように普及していない中で、24時間保育サポートを

申し込むことができるホームページを立ち上げ、ITを活用した子育て支援をアピールのひとつにしました」と現在、代表理事を務める森崎智美さん。

まずは、自団体で養成したサポーターによる一時保育サポートを行うことから始めると、子育て中の保護者たちにその存在が少しずつ浸透。またスタッフの情熱に、周囲の理解が得られるようにもなりました。それから資金調達や、環境作りなどの苦労を重ね、さまざまな障害をクリアしながら、組織を少しずつ大きくしていききました。

「時代の移り変わりとともに、子育ての環境も変化してきています。虐待の増加や産後鬱を患う人も増え、子育て支援の重要性が社会に普及することで、地域の子育て世代を支える存在として少し



▲ e子育てセンター HP



▲ 赤ちゃんタイムの様子(ひろばKUSU-KUSU祇園)

ずつ私たちの活動が認められるようになってきました」。

コロナ禍でもSNSを使用し、顔が見える交流を大切に

現在スタッフは10人。活動の柱になっているのは、一時保育サポートコーディネート事業と、祇園地区、緑井地区の2カ所で開いている広島市公募型常設オープンスペース「ひろばKUSU-KUSU」です。特に祇園地区は通勤族が多く、子育てで困った時にサポートを受けられるように、地域の団体と協力し、民生委員や保健師、専門家などと利用者を繋ぎ、いざという時に役立つように取り組んでいます。さらに、先輩ママさんとの交流イベントも行うなど、人との繋がり、顔が見える交流を大切にしています。

また、ホームページでは、子育てオープンスペースの申込状況が把握できるほか、オンライン講座の申し込み、SNSでの情報発信にも取り組んでいます。またコロナ禍で人と直接触れ合うことが難しくなっている今は、子育てオープンスペースの利用人数を制限して開催。それを補う手段として、広島県のオンライン「おしゃべり広場」事業にも参画し、オンライン会議アプリ「Zoom」を使って、自宅に居ながら気軽に子育てオープンスペースの雰囲気が楽しめるよう、SNSを活用したランチ会や遊びの会、育児相談なども積極的に行っています。

「昨今、コロナ禍で難しい問題も多々ありますが、時代を見据えながら子育て中の人に寄り添う活動を通して、安心して笑顔で子育てができる社会作りにも貢献していきたいです。親が健やかに子育てできることが子どもの笑顔にも繋がると、考えていますから」と森崎さんは今後について語ってくれました。

発足当時と今では、子育てを取り巻く状況や情報も変化し、生活様式も変化を迫られる中、試行錯誤しながらも、より良い環境作りに向けて情熱的に取り組む皆さんの活動は、とても心強く感じました。



▲ オンラインランチ会の様子(ひろばKUSU-KUSU佐東)

特集

01 親と子に寄り添う子育て支援

▶ 特定非営利活動法人e子育てセンター



誕生日会の様子(ひろばKUSU-KUSU祇園)

▶ 特定非営利活動法人CAP広島



子どもワークショップの様子

▶ 公益財団法人日本ダウン症協会広島支部えんぜるふいっしゅ



リトルキッズの会

05 らしくレポート ひろ記者が行く

▶ 子育ての「なんとなく不安」を「安心」へ!

05 らしくコラム

▶ 「育児不安やストレス」とのつきあい方
安田女子大学 教育学部 児童教育学科
山田 修三 教授

06 ようこそ!公民館へ

▶ 東区内公民館

07 人材バンク 名人 宝人 達人

▶ エアロビ・ヨガ・ピラティスインストラクター
深堀 悦子さん
▶ 三味線と小唄の縁
中本 鶴子さん

09 Hm助成支援団体のご紹介

▶ NPO法人日本タッチ・コミュニケーション協会
▶ Romui
▶ 堤の会

11 情報の森

15 プラザ通信

子どもを取り巻くあらゆる暴力から守りたい 「自分を大切にしていんだよ」

特定非営利活動法人CAP広島

気づいてほしい、自分が持っている本来の力

子どもたちが持つ、安心して、自信をもって、自由に生きる権利。この大切な権利を守りたい、との思いで活動している「CAP広島」は、平成7年、広島支部として発足しました。CAPとは、Child Assault Prevention（子どもへの暴力防止）の略。暴力を「人の心とからだを傷つける力」ととらえ、子どもたちを被害者にも加害者にも傍観者にもさせないよう、子ども自身の力で暴力に立ち向かうことができる援助をすることを目的とし、CAPスペシャリストの資格を持つ会員48人が活動しています。子どもたちを取り巻く、いじめ・痴漢・誘拐・虐待・性暴力などあらゆる暴力から身を守るため、子どもたち自身に何ができるかをワークショップ形式で伝えていきます。活動は広島市内を中心に保育所・小学校・中学校・公民館など。

理事長を務める岡本晴美さんは、「私たちの活動は、未然に防ぐことに加え、気づいてもらうことが重要だと思っています。暴力（特に性暴力など）に関しては受けることが当たり前ではないことに気づく、いじめにもさまざまな回避方法があることに気づく、知らず知らずのうちに人を傷つけていることに気づく、自分の周りには力になってくれる人がいることに気づく、ひとりじゃないことに気づく。

そこから自分が本来持っている可能性や力を信じ、自分を大切にしたい思いが芽生え、生きる力を手に入れることに繋がるのです。実際に、ワークショップに参加した子どもたちは、寸劇を通して自分に置き換え、さまざまな気づきを得ており、その反響は個別に行うトークタイムで多く聞かれるそうです。

「言葉をかけてもらうだけでも支えになります。直接言えなかったらメールでもいい。味方になってくれる人の存在は何よりの心に支えになります」と、話す岡本さん。

子どもの安心に必要な不可欠な大人の存在 同じ目線で優しく受け止めて

CAP広島のワークショップでは教職員や保護者を対象としたプログラムも提供しています。子どもが思い悩んでいる時に安心して話せる存在になれるために重要な取り組みとなり、「大人に余裕がないと子どもは遠慮して話さない場合もあります。子どもが話し始めたら、聞き出すのではなく、子どものペースに合わせて耳を傾けることが重要」と岡本さん。けれど正解のない問題に大人も困惑してしまうという現状もあり、「大人にも相談できる場所、相談できる人の存在が大切。誰かに助けてもらいながら、自信を持って子どもと向き合っていけることが理想です。大人も子どもも自己肯定感を育み、備わっている力を信じてほしい。そんな力を引き出し、サポートしていきたいです」と、話してくれました。誰もが願う「支え合う社会」の実現。それには自分を信じることから始めていくのだという思いが伝わってきました。



▲理事長の岡本晴美さん



▲子どもワークショップの様子



▲就学前ワークショップに使用する人形

障害のある人もない人も共に暮らし合う 特別ではない当たり前の世の中に

公益財団法人日本ダウン症協会広島支部えんぜるふいっしゅ

もっと知ってもらいたいダウン症のある人のこと

令和2年で30周年を迎える「えんぜるふいっしゅ」は、平成2年、ダウン症を主とした障害のある子どもとその家族の会として発足しました。自主療育に取り組みながら、障がいのある人だけでなく全ての人が豊かに暮らせる社会を目指しています。

主な活動内容は4つ。ダウン症のある本人や家族への支援が主となる部会活動、広島県内の8ブロックにより行われる定例活動、社会と繋がる啓発と支援活動、会員の希望に沿い自主的に行うグループ活動です。

全世界で啓発活動が行われる、3月21日の世界ダウン症の日にあわせ、音楽発表会、スピーチ大会、直近の過去4年間は広島市中央図書館での写真展を行っています。



▲職場体験の様子

また、イベント会場などでコーヒーサービスを行う「カカオ活動」や、大学生とバディを組む職場体験を実施。ダウン症のある人もマナーを身につけ、お客さんと接することや、働くこと、人の役に立つことの喜びを感じるとともに、一般の人へのダウン症の理解を深める活動をしています。

「障がいのある子の親となったからこそ分かった事や、経験を基に、社会との関わりを深く、強いものにしたい」と考える会長の藤山節子さん。「自分の子がダウン症と診断された時、情報は得



▲笑顔の写真展

られても心が満たされない。そんな時、親の会に参加し、同じ思いを共有することで、はじめて自分の気持ちが解放され肩の荷が降りの方がたくさんいます。私もそのひとりです」と言います。

無意識をやめ、違いを認める 優しい社会に

近年、一般的となりつつある「出生前診断」。ターゲットとなる「ダウン症」の当事者団体として、大学病院遺伝子診療科等や遺伝子診療専門のクリニックと連携し、受診者を対象に「ピア（仲間）カウンセリング」を要請される事もあります。ピアカウンセリングでは、社会福祉政策や生活面、さまざまな支援があることなどを伝えます。「親、特に身ごもる女性が苦しまないためにも、より多くの事実、実態を学んだうえで判断してほしい。そして、どんな子も祝福されて生まれる権利、愛を持って育てられる権利があるということを知ってほしい」と、藤山さん。「国によって取り巻く環境は異なりますが差別のない社会を目指すという思いは同じだと思います」。さらに、「差別心」は誰の心にも存在すると認めることが大切だとい、認めて生活していれば、差別してしまった時に気づき、謝り、改めることができます。無意識ほど罪なことはない。できる、できないで判断するのではなく違いを認める社会を目指します。ゆるやかな社会であれば優しい世界になる。例えば、車いすが通れる道路を作れば、他のみんなも通りやすい道になるといいます。難しいけどその実現が私の夢です」と、覚悟の瞳が印象的でした。



▲会長の藤山節子さん



▲接客などを学ぶ「カカオ活動」



▲マーガレットコンサート（障がい者と広響とのジョイントコンサート）への参加（令和2年2月）